

非親族との社会関係が高齢期の主観的幸福感に与える影響

—「弱いつながり」に着目して—

後藤 扶美香

【序論】

高齢者の人口増加と共に、高齢者の居住形態も変化している。特に、独居世帯の増加は男女共に顕著であり、今後もその数は増え続けると推計されている。また、独居高齢者が増加した場合、家族との常時の交流は減少し、家族以外の他者である非親族との交流も増えていると推測できる。今後、高齢者の社会関係については家族だけでなく非親族関係に着目した研究も行う必要があると考えられる。こうした観点から本研究では独居高齢者の非親族ネットワークに着目した。加えて、先行研究を概観すると、近年のネットワーク研究は社会的孤立といった社会問題におけるリスクの文脈で研究がなされている。しかし、独居高齢者の増加の背景には健康的なサポートを必要としない高齢者が増えたことも一因として考えられる。そのため、ネットワークのマイナス面よりも、非親族ネットワークが、高齢者に対して、プラスの影響を及ぼすのかについての再検討が必要であると考えられる。また、澤岡他(2012)によると、独居高齢者は親族よりも非親族と日常的に交流する機会が多く、その非親族に関してもあいさつをする程度や世間話をする程度の他者が多いとされている。そのため、非親族との関係の中でも「弱いつながり」に着目していく必要があると考えられる。

【研究 1】

[目的]

独居高齢者における非親族とのネットワークが主観的幸福感に及ぼす影響について検討を行った。非親族ネットワークとしては、先行研究において用いられていた親友関係と近隣関係を指標とした。

[方法]

高齢者の縦断研究である SONIC 研究の 2010 年の調査に参加した 69 歳から 72 歳の 1000 名のデータを用いた。属性を統一するために、独居高齢者 123 名と同数の同居高齢者を性別、教育歴、経済状況の変数でマッチングさせ、それぞれ分析を行った。

変数は、基本属性(性別、教育年数、経済状況、居住形態)、ネットワークの指標として親友の人数、付き合いのある近所の人数、主観的幸福感の指標として、感情的 Well-being、WHO5 を用いた。

[結果と考察]

非親族ネットワークが主観的幸福感に与える影響を検討するために階層的重回帰分析(強制投入法)を行った。その結果、親友の人数と独居高齢者、同居高齢者ともに、親友の人数がポジティブ感情に関連があることが示された。よって、親友関係の人数が多いことは、居住形態を問わず、高齢者のポジティブ感情を高めることが示された。

【研究 2】

[目的]

研究2において非親族との「弱いつながり」を測定するための新たな指標を作成し、独居高齢者における「弱いつながり」の関係が主観的幸福感に及ぼす影響について検討した。

[方法]

SONIC 研究の 2016 年度の第 3 波調査のデータを用いた。参加者は 75 歳から 77 歳の高齢者 561 名であった。属性を統一するために、独居高齢者 101 名と同数の同居高齢者を性別、教育歴、経済状況の変数でマッチングさせ、分析を行った。「弱いつながり」を測定する項目を、古谷野他(2016)の「場を共有する他者」の概念を元に作成した。具体的には「人が集まる場所(病院の待合室、健康教室、サロン)に行った時、決まって話をする人はいますか」、「あなたは、あいさつを交わすようなご近所の方はいますか」の 2 項目で「①場を共有する人数」「②あいさつをする近所の人数」を測定した。その他の変数は研究 1 と同様の変数を用いた。

[結果と考察]

従属変数をポジティブ Well-being、ネガティブ Well-being、WHO5 とし、独立変数を性別、教育歴、経済状況、居住形態、「弱いつながり」ネットワーク、居住形態×「弱いつながり」ネットワークの交互作用として強制投入法による階層的重回帰分析を行った。

重回帰分析の結果、場を共有する関係は居住形態を問わず、ポジティブ Well-being と WHO5 に関連することが示された。よって、場を共有する関係が多いことはネガティブ感情を低下させ、精神的健康状態を良くすることが分かった。あいさつする近所の関係については、ポジティブ Well-being において、居住形態とネットワークの交互作用がみられた。またネガティブ Well-being に関しては居住形態を問わず関連がみられた。よって、同居高齢者は関連がなかったものの、独居高齢者にとってはあいさつする関係が多いほど、ポジティブ感情が高くなることがわかった。さらに、あいさつをする近所の関係が多いことが高齢者のネガティブ感情を低下させることが示された。これらのことから、独居高齢者は、同居高齢者と比べて「あいさつをする近所の関係」が特に重要であることが示され、高齢期の人々にとって、「弱いつながり」を持っていること自体が高齢者の主観的幸福感にプラスの影響があるという可能性が示唆された。

【総合考察】

本研究を通して、高齢者において、非親族とのソーシャル・ネットワークの数が主観的幸福感に関連していることが示された。また、研究 2 からは家族や親友のような親密な関係がなくとも、「弱いつながり」があることが心理的に良い影響を与える可能性が示唆された。「弱いつながり」程度のネットワークであっても心理的側面への影響があることが示されたため、孤立防止に向けた居場所や地縁作りの取り組みに対しても、従来とは異なった「弱いつながり」作りからのアプローチが可能であると考えられる。加えて、今後は「弱いつながり」が、高齢者のサポートのリソースになり得るかといった、実質的な場面の有用性に関しても検討していくことが望まれる。

しかし、研究の限界として、いまだ「弱いつながり」を測定するための明確な指標が確立されていないことや、質問項目の内容によっては居住環境や社会参加による結果の個人差が大きいことが挙げられる。非親族ネットワークの指標に関しては今後も精査していく必要がある。(臨床死生学・老年行動学)

【引用文献】

古谷野亘・澤岡詩野・菅原育子・西村昌記(2016)．高齢者が日常生活において交流している他者との関係 —その分類と把握— 老年社会科学, 38 (2), 169.

澤岡詩野・古谷野亘・本田亜起子(2012)．都市のひとり暮らし後期高齢者における他者との日常的交流 老年社会科学, 34 (1), 39-45.